

嬉野っ子ワクワクデザイン令和5年(学校教育)

具体的活動	教育委員会における自己評価				
	評価	項目	項目ごと実績・成果・評価	課題・問題点	改善点
具体的 施策	(1) 確かな学力の育成事業	<ul style="list-style-type: none"> 主体的・対話的で深い学びを取り入れた「嬉野メソッド」の徹底を図る。 「確かな学力育成部会」等により、学習状況調査等の各種調査の詳細な分析に基づく課題把握とその対策の充実を図る。 「学びの習慣づくり」の活用により、自主学習など市内小中学校共通した取組を推進する。 小学校で英語専科教員を活用した指導方法の研究と実践を行う。 中学校において、「放課後等補充指導支援事業」により、基礎学力の向上を図る。 タブレット端末活用を活用した授業の充実、オンライン英会話の実施・拡大を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校訪問や授業研究会等において授業を参観した。全ての学校で「嬉野メソッド」による授業展開は確立できていた。また、学習状況調査の結果も、中学2年生の数学以外は佐賀県の正答率を上回っている。 9月に「確かな学力育成部会」において、課題を把握し、対策を考え「できたら褒める」等の共通理解を図ることができた。 「学びの習慣づくり」を活用し、基本的な生活習慣の確立のための取組や、各学校で工夫した自主学習の取組ができていた。 活動を多く取り入れたり、タブレット端末などを多く活用したりすることで、基本的な英語力を付けることができた。 市内4中学校において実施することができた。主に基礎的・基本的な内容に取り組むことができた。 市内タブレット部会の実施により各学校での取組について情報共有を行うことができた。また、共有した内容を参考に各学校での実践が行われた。 オンライン英会話では、中学校において1年生まで拡大して実施することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちが「なぜ?」「どうして?」「考えたい」「話し合いたい」と思い、主体的に学ぼうとする発問等の工夫が必要である。まだまだ教師主導(教師による説明が多い)の授業が見られる。 家庭学習への取組に対しては、個人差がある。 加配教員の勤務が複数校に渡っているため、学校行事等での授業日の変更では、学校間での連絡調整が必要である。 講師の先生方の確保が課題である。また、インフルエンザやコロナなどの感染症による振り替えが難しい現状である。 ICT推進リーダーや限られた先生だけの活用となっている学校が見られる。 英会話のカリキュラムや内容等について、検討が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校訪問や授業研究会等において指導助言を行ったり、よい取り組みについては、引き続き校長会や部会で紹介したりすることで、授業づくりの質的改善を図る。 タブレット端末の学習ドリルを活用したり、探究的な課題に取り組みせる等、家庭学習の内容の工夫をすすめる。また、家庭学習も自分で計画を立て取り組めるような工夫を行う。 専科教員だけではなく、教頭や教務を含めて行事等の確認を行い計画を立てる必要がある。 講師の確保に早くから取り組み、計画的な運用を行い、余裕をもった実施を進める。 全職員が活用していくために、各学校での計画的に研修会を開くなどの工夫を行う。 オンライン英会話部会を積極的に活用し、委託業者も含めた話し合いの場を設定して行く。
	(2) 豊かな心の教育推進事業	<ul style="list-style-type: none"> 嬉野市副読本「生きる力の教科書」(三訂版)を活用した指導の充実・深化を図り、インターネットやSNSについて、その功罪の理解を図る。 嬉野の特産である「お茶」に関する学習等を通して地域学習「嬉野学」を積極的に展開し、嬉野市を愛する心や気質を高める「心の教育」を推進する。 SDGs達成にむけた学校における取組を推進する。 巡回公演事業を積極的に招致し、優れた文化・芸術に直接触れさせることにより、豊かな心の育成を図る。 生成AIの教育利用の方向性を示し、情報モラルをはじめ情報活用能力育成に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 嬉野市副読本「生きる力の教科書」(三訂版)の資料を活用し、指導を工夫しながら、インターネットやSNS等の功罪を学ぶ授業が実践できた。 お茶摘みやお茶の入れ方体験をはじめ多くの体験活動を行いながら地域学習「嬉野学」を実践し、嬉野を愛する心や気質を高めることに努めた。 SDGsについて講師招聘を行い研修をしたり「NIE」を活用した授業を実践したりして各校工夫した取り組みがなされた。 巡回講演事業については、9校招致し、児童劇、オーケストラなど本物の芸術を鑑賞体験することができた。加えてヴァイオリニストの亀馬さんが大野原小中を訪問するなどコロナ禍による制限がなくなり、心を豊かにする体験が昨年度よりも多く実施できた。 生成AIの利活用については、文科省からの通知等の周知を図りつつ、情報教育の年間計画の再構築を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 古くなっている情報の更新やデジタル教材の作成など検討が必要である。 今後も継続した「嬉野学」の取組が求められる。 学校によって特設の取組に濃淡がある。 現在の動向を踏まえ各学校の情報教育の年間計画の見直しが求められる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「生きる力の教科書」改訂の年にあたるので、情報の更新を行い、より、活用しやすいものにバージョンアップしていく。 今後も各学校の「嬉野学」に係る体験活動を地域コミュニティ・保護者と連携し推進する。 特設した学習だけでなく日々の教科学習とうまく関連付けながら学校による濃淡がないよう行っていく。児童生徒がさらに意識できるような取組を進めていきたい。 ベースとなる計画をもとに各学校の計画作成を促していく。
	(3) たくましい心身の育成事業	<ul style="list-style-type: none"> 県教委主催による「スポーツチャレンジ事業」に積極的に参加したり、各学校で工夫した体育的活動を取り入れたりすることを推進し、児童の運動に対する意欲と体力を高める。 学校、家庭、地域が連携して、望ましい食習慣を身につけさせ、朝食摂取率100パーセントを目指す。 「早寝・早起き・朝ごはん」に取り組み、1日の生活リズムの確立を図る。 不登校対応コーディネーター及び教育相談部会等を中心とし、学校、教育相談員、SSW等が連携し合い、児童生徒に寄り添った取組の強化を図りながら、早期発見・早期対応に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 各小学校で外遊びを推奨したり、マラソン大会を行ったりして、児童の運動に対する意欲と体力の向上に努めることができた。 地域コミュニティと連携し野菜の栽培を行ったり、栄養教諭による食育指導を行うことができた。食育指導は、すべての学校で計画的に行うことができた。 すべての学校で生活チェックシート等を活用し、生活リズムの確立を図ろうとすることができた。 年間4回(1月までは3回)の合同連絡会を行い、不登校児童生徒の対応についての情報交換や共通理解を図ることができた。また、外部から講師の先生を招聘してケース会議の持ち方についての研修会を開催し、模擬ケース会議を経験する中で関係職員のスキルアップに努めた。 	<ul style="list-style-type: none"> 健全な食生活や生活リズムの確立において、地域、家庭との連携は欠かせない。同時に児童生徒自身が主体的に取り組めるようになることが望ましい。 12月末現在における市内の不登校児童生徒数は昨年度よりも増加傾向にある。各学校においてチーム学校としての対応の在り方が課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に取り組めるよう、地域、家庭、養護教諭や栄養教諭などと連携した取組を進めていく。 不登校対応コーディネーターの働きかけにより学校や関係機関等が連携を図り、チーム学校として早期発見・早期対応・個に応じた対応を進めることができるような取組を進めていきたい。
	(4) 特別支援教育等の推進事業	<ul style="list-style-type: none"> ユニバーサルデザインを踏まえた教育環境を作り、インクルーシブ教育を推進する。 市雇用の早期支援コーディネーターを活用し、幼児期からの教育相談や就学相談を行うことにより、本人・保護者に十分な情報を提供するとともに、関係機関との連携、幼稚園・保育園と学校及び子育て未来課との連携を密にし、児童生徒の適切で滑らかな就学や進学を目指す。 「特別支援教育部会」等において、特別支援教育に関する研修を行い、特別支援教育コーディネーターを核に教職員の理解を深め、指導力の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 全学校で、教室の掲示物を統一したり、必要な情報は視覚的に分かるように提示したりするなど、だれにとっても学びやすい教室環境づくりに取組んでいる。 早期支援コーディネーターが、定期的に市内の幼、保、認定こども園を訪問し、幼児の観察、保育者や保護者への支援の助言などを行った。子育て未来課、福祉課とも連携を取り、保護者の思いに寄り添いながら、療育や就学をすすめることができた。 「特別支援教育部会」において、各学校の特別支援教育コーディネーターを対象に、「就学支援に向けた校内委員会について」の研修を行い、児童生徒にとってのよりよい学びの場についての理解を深めることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒にとってのよりよい学びの場について、毎年見直すことが必要である。 幼、保、認定こども園への適的な訪問で在園児についての支援はスムーズに行われているが、在宅児についての情報が把握しにくい。福祉課、子育て未来課、健康づくり課とも連携し情報共有することが必要である。 全体的に児童生徒が抱える課題や困り感が多様化しているため、必要な指導支援を行うための職員のスキルアップを図る必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> だれにとっても学びやすい環境づくりや、わかりやすい授業づくりを学校全体で取り組んでもらうように、部会や学校訪問等で働きかける。 就学前の在宅児について、福祉課、子育て未来課、健康づくり課と連携をとって、早期からの就学支援を行う。 特別支援教育担当職員だけではなく、全職員のスキルアップを図るために、校内研修の充実を図り、県の「障害のある子どもの学校生活支援事業」の活用や各種研修への参加を推進する。
	(5) 校長先生の知恵袋事業	<ul style="list-style-type: none"> 校長先生の学校マネジメント力の向上を図り、学力向上や体験活動の充実させ、特色のある魅力ある学校づくりを推進する。 校長の学校経営ビジョンに基づく実施計画のプレゼンテーションを審査し、校長の独自性・主体性を生かした学力向上対策などの取組を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 計画に沿った活動が実施され、特色ある学校教育の推進を図ることができ、校長のマネジメント力の向上につながった。 体験活動(牧場体験・バイオリン教室など)や学力向上のための取組(漢字検定・NIE教育など)が充実し、子どもにとって魅力ある学校づくりにつながった。 	<ul style="list-style-type: none"> 校長の学校経営ビジョンに基づいた内容や、校長のマネジメント力を生かして、児童生徒の学力向上や豊かな心の育成につながる活動を工夫して行い、更なる魅力ある学校づくりを行っていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 校長のマネジメントとして、本事業の目的に沿ったものであり、自校の児童生徒にとって必要なものを見極めるために、校長によるプレゼンテーション審査を行う。また、4月当初に、計画の見直しがないかどうか再確認を行う。
	(6) らく・さんプラン教育推進事業	<ul style="list-style-type: none"> 各中学校区において、令和の新時代を見据えた新たなスリーステップをスタートする。 塩田中学校区において、嬉野市教育委員会指定の小中連携学力向上事業に取り組み、授業公開などを通して学力向上に向けた実践を発表し、指導方法などを共有する。 学校生活や学習面において、スムーズな中学校生活がスタートができるよう、「小中合同研修会」や「春休みの課題の工夫」などを実施し、学びの連続性を確立する。 ノーデジタルデーの同日実施など一貫性、統一性をもった指導の在り方を研究する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各中学校区で、令和の新時代を見据えた新たなスリーステップのステップ1の取組がなされた。 塩田中学校区では、各学校の公開授業に小中の教員が参加し、授業づくりや指導方法について相互に意見交換がなされ、連携が一層深まった。 大野原小中、吉田小中は相互の乗り入れ授業や合同研修会が行われ、連携がとれている。 「小中合同研修会」等で、各学校の取組や子どもの実態等の情報共有を行い、指導支援に生かすことができた。 各中学校区で、「ノーデジタルデー」や「家庭学習強化週間」の同日実施など、一貫性・統一性のある取り組みが行われた。小中同日での実施によって、家庭と連携した取り組みができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 「小中合同研修会」が情報共有が中心になっている。 吉田中では高1ギャップが見られる。 今後も、各中学校区で一貫性・統一性のある取り組みを行うことで、9年間を見据えた教育を遂行していくことが必要である。 取組が若干マンネリ化してきている。 	<ul style="list-style-type: none"> 「小中合同研修会」を、1つのテーマで話し合ったり研修したりするなど工夫して行う。 各中学校区で小中相互の授業参観や公開授業研究会への参加を働きかける。 高1ギャップ解消のため、4中学校で交流も計画していく。 各中学校区の「らく・さんプラン部会」を軸として一貫性・統一性のある取組、児童生徒の主体的な取組になるよう、引き続き働きかける。

評価委員からの指摘事項・意見	評価結果(4段階)
<p>○ オンライン英会話、校長先生の知恵袋事業、早期支援コーディネーターや不登校対応コーディネーターの配置などの数多くの先進的な取組や義務教育9年のスパンで一体的な教育活動を行うためのらく・さんプラン教育推進事業やコミュニティスクールの全校導入などの実効的な取組により、6つのプロジェクトすべてにおいて確実に実績と成果を上げることができている。</p> <p>このような取組実績に加え、</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちが将来の夢や希望を持ち学習活動に臨むことができるよう、個々のよさや適性を見出し励ます教育活動の一層の充実 そのための体験活動や職場体験学習など、本物に触れ、本物を体験する活動の充実 嬉野ならではのよさだけでなく、ICTを有効活用し国内外の様々なところと繋がりよさに触れさせることで子どもの世界観を広げさせる 子どものよさを引き出し、節目となるこそという場面で子どもとことん関わり、導くことのできる教師の育成 教師の負担軽減や教師不足を補完するためのボランティア人材バンク登録などによる地域人材の活用 <p>を図ることで、嬉野市ならではの教育活動が一層充実し、その成果が子どもたちの姿とおして表れるものと考えらる。</p>	<p>A</p>

指摘を受けての改善点
<p>令和6年度からスタートする「嬉野市 教育新次代プランII」を踏まえ、指摘いただいた5つの点について、つぎの取組を進めていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちが将来の夢や希望を持ち学習活動に臨むことができるよう、個々のよさや適性を見出し励ます教育活動の一層の充実 <ul style="list-style-type: none"> キャリアパスポート、Q-U、各種アンケートや個別の発達検査の結果などを活用し、児童生徒一人一人の理解を深め、伸ばす教育を推進する そのための体験活動や職場体験学習など、本物に触れ、本物を体験する活動の充実 <ul style="list-style-type: none"> 引き続き、巡回公演事業の招致、文化・芸術・スポーツ体験の充実を図る 嬉野ならではのよさだけでなく、ICTを有効活用し国内外の様々なところと繋がりよさに触れさせることで子どもの世界観を広げさせる <ul style="list-style-type: none"> オンライン英会話事業の充実、国内外、外国とのオンラインによる授業など、柔軟な発想でのタブレット端末活用を奨励する 子どものよさを引き出し、節目となるこそという場面で子どもとことん関わり、導くことのできる教師の育成 <ul style="list-style-type: none"> 若手教師割合が増える中、やる気をもって働ける風通しのよい職場環境づくり同僚性を高める取組を推進し、教師の育成を図っていく。 教師の負担軽減や教師不足を補完するためのボランティア人材バンク登録などによる地域人材の活用 <ul style="list-style-type: none"> 地域コミュニティとの連携をさらに深め、学習への地域人材の活用を進める

評価4段階	達成率
A	達成(80%以上)
B	ほぼ達成(51~79%)
C	やや不十分(50~21%)
D	不十分(20%以下)